

地域人材育成の教育社会学（2）

一地域型学校知の学習過程の組織化

○樋田 有一郎（東京大学大学院）
 沖塩 有希子（千葉商科大学）
 藤村 朝子（日本女子大学大学院）

岩木 秀夫（日本女子大学）
 西田 亜希子（島根大学）
 樋田 大二郎（青山学院大学）

1 研究の背景と目的—過疎地の高校の負のスパイラル—

近年、少子高齢化の進む地方郡部の高校では入学者減と“高校の魅力の低下”の悪循環（「過疎地の高校の負のスパイラル」）が進み、高校は統廃合の危機を迎えている。そうした中で、地方の地域と高校は地域活性化と新しい進路・学力観（「地域型学校知」）の文脈で連携し地域の活性化と高校の魅力化を同時に推進している。本報告では、こうした連携の背景を明らかにしつつ、連携を支える魅力化コーディネーターの役割を明らかにする。

2 調査の概要（島根県高校魅力事業）

報告者は、島根県の地方郡部の高校と地域の協働で両者の活性化を図る島根県「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」（以降、魅力化事業）の対象校全8校その他の郡部の高校での訪問聞き取り調査を行った。魅力化事業は、離島・中山間地域の県立高校と町村が連携し、高校魅力化と地域活性化が行われることを目指す。対象校には、魅力化コーディネーターを置くことが義務づけられている。

3 「過疎地の高校の負のスパイラル」

3-1 「過疎地の高校の負のスパイラル」

これまで、高校の魅力（高校への期待）は、①進路（学力）保障と②部活動であったが、少子高齢化による生徒数減少は、これらの魅力を低下させている（複数の訪問調査校校長）。①に関しては、いわゆる「標準法」によって生徒数と教員の配置は規定されており、生徒数の減少は教員の減少へと結果し、選択できない教科や取得が困難な資格を生じさせている。よく見られた事例は、理科系の科目の教員がいなくなり理系進学が困難となることであった。②に関しては、生徒、教員の減少により部活動の数が減る。この他、生徒数の少なさは人間関係の固定化を生む等が指摘された（訪問調査）。

高校の魅力低下は、これまでは高校卒業後に生じていた地域からの若者の流出を、中卒後から生じさせはじめていた。高校入学者数の減少が生じ、さらなる高校の魅力低下が生じている

ことが指摘された（「過疎地の高校の負のスパイラル」）。

3-2 「適正規模」と「選択と集中」の議論

上記の状況のなか、次の二つの統廃合を進める議論が聞かれた。①小規模校では子どもにより教育を受けさせることができず統廃合は子どもにより教育を受けさせることに繋がる。（「適正規模」の議論）②離島・中山間地域の小規模校の統廃合は財政上の効率化と都市部（沿岸部）の高校に資源を集中し都市部の高校の教育効果を高める。（財政の議論、資源の選択的集中の議論）

4 「高校と地域活性化の文脈」

魅力化事業の対象校8校は、地域との連携によって高校教育に新しい魅力を生み出していた。高校は①地域活性化の生命線と、②地域活性化の最前線の二つの意義を持つ。

①地域活性化の生命線は、高校存続問題（統廃合問題）が町村に与える影響のたとえである。若林敬子の高校統廃合研究は地域にとっての高校の意義が議論されるが、その中で、過疎化の文脈では、高校が無くなると過疎化に拍車がかかるという。子育て世代の流出と同時にU I ターンの障害となる。調査校のある町村の地域振興課の職員いわく、「地元の子育て世代は高校統廃合問題には敏感だ。また、U I ターン促進をしても、高校がなくなってしまうとあれって感じになってしまう」と述べた。

②地域活性化の最前線（高校魅力化の最前線）

調査対象校の高校の取り組みは、地域活性化を目的として行われると同時に、「地域型学校知」と呼ばれる従来型の受験学力に対置されるグローバル教育を意識した学校知と進路形成を行っていた。高校生自身が地域の活性化を行うと同時に地域の活性化のきっかけとしていた。地域と高校の連携、また、高校生の将来の進路に対してグローバルを意識した水路付けを行っていた。

4 魅力化コーディネーター制度—社会関係資本の機能から見るコーディネーターの役割

魅力化事業では、魅力化コーディネーター制度の果たす役割が評価され、第2期の事業では、コーディネーターの導入が義務づけられている。コーディネーターは高校と高校の外部の情報と資源を橋渡し（Bridging）の役割を負う。橋渡しする人や資源をタイプ分けすると、①都会－地方（地域、高校）の橋渡し型、②高校－地域の橋渡し型、③高校－行政（町村役場）の橋渡し型に分類された。また、コーディネーターになる人材の出身は次のタイプが見られた。「Iターン者型」、「地元でずっと育った型」、「Uターン者型」である。以下、コーディネーターの役割の類型から各々の特徴を示したい。

①都会－地方の橋渡し型機能

下記のような役割がみられた。

- ・都会での経験、人脈が豊富さを活かし発信力を持つこと。
- ・都会の考え方を地方（地域、高校）に持ち込むことができること。
- ・よそ者の立場で地域の既存のしがらみから距離を置き外からの視点を持つこと。
- ・地域の“ジラ”（＝駄々。不満。の意味の方言）を集めること。
- ・地域に改革を起こすこと。「若者、よそ者、ばか者」としての地域活性化の役割を果たすこと。

このタイプは、Iターン者型が得意なコーディネーターの役割である。田舎での起業（田舎ベンチャー）を目指す都市の若者や都市の大企業出身者（教育産業、人材派遣・育成産業など）が見られた。

彼／女らは社会人基礎力、コミュニケーション能力といった都市の労働市場で価値を持つ能力に対する関心が強い。地域の可能性、課題に取り組むこと（「地域の教材化」）で普遍的能力の育成を目指すグローバル教育を志向する（Think locally, act globally）。

Iターン者は孤立が課題となっていた。高校や地域から、「だめだったら逃げ出すと思われてしまう傾向があり（ある校長）」、地域の信頼構築に時間がかかることが課題となっていた。Iターンで地域にとけ込むには、地域と共に歩き、“半歩先”を見ることが求められていた（『巡りの環』）。

②高校－地域の橋渡し型機能

このタイプは、高校のニーズを地域に伝え（地域のネットワークの結節点にいる）、高校と地域の資源をスムーズに繋げていた（Bridging）。

地元でずっと育った型の人材が多く、地元の企業経営者、商工会の青年部員などが見られた。

彼／女らの特徴としては、地元への危機意識が強く、地域貢献意識が高い。地域の課題を地元住民としての立場で理解している。地域の諸資源との結びつきが強い。

本来は地域住民も高校に協力したい気持ちがあったがやり方が分からなかった（「近くて遠い県立高校」と呼ばれていた）状況を変えることが期待されていた。高校が制度的に何かするには高い費用が生じるが、地元育ち型コーディネーターは、校外の資源の利活用や購入のコストを押さえられる（花壇を作りたい→地元の建設業者が無料でやってくれる。イベントで食材が必要→口利きで安く仕入れられる）高校生が地域活性化をする活動は地域住民に地域活性化を活発化する契機となる（〇〇高校生が頑張っているのを一緒に頑張ろう。）

このタイプが目指すグローバル教育は、高校教育の中でグローバルな視点から地域の課題を解決できる人材を作り出そうとするものであり、将来のUターンを意識していた（Think globally, act locally）。

③高校－行政の橋渡し型機能

このタイプは、行政（地元町村役場）と県立高校の繋がりを作る。特に、町村から高校への財政支援を促進する。

このタイプには、現時点ではローカル・エリート職である地方公務員としてのUターン者があたる。大学卒業後、あるいは、都市就職を経て地元に戻って地方公務員としてコーディネーターとなるケースが見られた。その高校の卒業生である場合も見られた。

前2タイプの機能を折衷した機能を持っていた。地域で高校までを過ごしており地元出身者としての信頼の形成と地元の資源へのアクセス可能性を持ち都市での経験も有していることにくわえに行政との繋がりを持っていた。

5 コーディネーターの設置の状況

魅力化対象高校によって上記の類型をどう設置するかは違いが生じていた。魅力化事業の力点の差異がコーディネーターのタイプ・設置の違いを生んでいた。いくつかの高校では、コーディネーターの複数化に取り組んでおり、複数のタイプのコーディネーターを組み合わせで設置することにより、連携の効率化と魅力化事業の多層化を図っていた。

※引用、参考文献、データの紹介と詳細な議論は当日行いたい。